

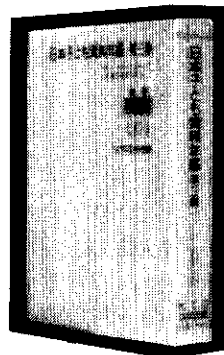
〈書 評〉

日本子ども資料年鑑 第三巻

日本総合愛育研究所編集

27×20cm 568頁 KTC 中央出版

1992年 11,000円



適切な小児保健活動の実践には、適切な資料収集が基礎となる。その資料は、保健領域だけでよいわけではなく、子どもの生活のあらゆる場面での資料が必要である。それを保健の問題とどう関連づけて分析できるかが、活動の成果に影響する。

現代は情報の時代といわれており、資料などは簡単に入手できるように思われているが、現実はその生やさしいものではない。例えば、教育に関する統計資料は、教育関係機関に出向いて、頭を下げて頂いて来なければならない。日常の生活のなかで、子どもの遊びについては、それに関する調査研究所の報告をその都度探さねばならない。こんな経験を多くの人がしたはずである。

わが国の「子ども」に関する伝統ある研究所の愛育研究所は、1988年には日本子ども資料年鑑（第一巻）

を刊行し、此の度その第三巻が出された。第一巻が刊行されたとき、いろいろと参考になった。自分では子どもに関する資料をいろいろ収集していたつもりだったが、いかに穴だらけであったかがわかり、それ以来、本書の資料を参考にすることにした。

資料収集とその編集の方に対しては心から敬服する。もう少し余裕がある編集だと見やすいであろうが、紙面と料金の点からは仕方がないのかもしれない。内容は、統計資料が中心で、領域別に整理されている。例えば、人口動態から今日人気のある赤ちゃんの名前など、「硬軟」多岐にわたって掲載されており、手抜きをして、必要な資料が入手できる貴重な本として、ここにご紹介しておきたい。

高野 陽 (母子保健学部)